

〔研究論文〕

ジェンダー概念の再考
——セックスとジェンダーの区別をめぐって——

上谷 香陽

〔Article〕

Rethinking on Gender/Sex Dualism

Kayo UETANI

Abstract

This paper considers some critical discussions about the sex/gender dualism.

They argue that the dualism presupposes that on one hand there is crucial difference between women and men ; on the other hand there is crucial similarity among women(or men).This presupposition overlooks the difference among women (or men) and accepts the idea that there is some essential difference between women and men by assuming a natural sex without any social, cultural and historical contexts.

Against the sex/gender dualism, an alternative view of gender has been discussed since 1990'. This view argues that, whether physically or socially taken, who is a 'woman (or man)' and what does that category mean are determined in a specific context. This view helps to reconsider the concept of gender which assumes the analytic distinction between sex and gender and argues that dividing someone into woman and man is itself a social, cultural and historical matter, namely "gender".

Adopting this view of gender, we can respecify the issues on the sociological investigation of gender. How division of sex can be articulated in each context can be itself an important issue on the sociological investigation of gender. Being a woman(or man) is produced through some activities and in itself a social phenomena.

This paper explores a kind of view of language in these reconsiderations of the concept of gender. From this view of language, identifying, recognizing or naming someone as a woman or man is not simply representation of some given object with language, but is itself doing something, namely a language –use-practice. Being a woman (or man) is not a given social fact but a social phenomena constructed in and through people's language-use-practices.

Through these examinations, this paper raises some issues on the sociological investigation of gender about what gender is and where we should find the social phenomena of gender.

1. はじめに

本稿では、主として1990年代以降英語圏におけるジェンダーをめぐる理論的考察でなされるようになった、ジェンダー概念再考をめぐる諸議論を検討する。本稿で主として取り上げるのは、「ジェ

ンダー (gender) 概念をその対概念としての「セックス (sex)」概念とともに再考する議論である⁽¹⁾。このような議論がなされるようになった背景には、そもそもフェミニズムの主体であり対象であるはずの「女性」とは誰を、あるいは何を意味するのかという問題提起がある (荻野 1995 : 103)。性別を生物学的なもの (セックス) と捉えるにせよ、社会・文化的なもの (ジェンダー) と捉えるにせよ、そこには男性と女性の間には決定的な差異がある一方で、女性間、男性間には決定的な共通性があるという前提が置かれている。このような前提に依拠した議論では、「女性」と一括りに分類される人々のあいだの差異の問題が不問に付されてしまう。また社会的、文化的、歴史的文脈をまねがれた、自然としての性別 (セックス) の存在を前提とすることにより、結果的に、男性と女性の間には何らかの本質的な違いがあるという見方を容認することになりかねない、という問題提起である。

このような問題提起を受け、身体的なことがらであれ社会的なことがらであれ「女性」とは誰か、何を意味するのか、ということは特定の文脈において決定される、という見方が提示されるようになった (荻野 1995 : 104)。この見方は、ジェンダーとセックスの分析的な区別を前提にしたジェンダー概念の見直しを促すものである。身体的なことがらをも含めて何事かが男性と女性に二分されうるということは、それ自体社会的、文化的、歴史的なことがら、つまり <ジェンダー> として捉えられるとするのである (Scott 1988=1992, Butler 1990=1999, Nicholson 1994=1995, Scott= 荻野 1999b)。このようなジェンダー観の転換により、性別について論じようとする際の問題も設定し直される。それぞれの文脈で性別それ自体がどのように分節化されるのか、それ自体を問うことが可能になるのである。女性あるいは男性「である」ということは何らかの活動の産物であり、それ自体一つの社会現象として捉えられるのである。

ジェンダー概念をこのような方向で捉え直そうという議論には、ある種の言語・概念観が伴っていると考える。女性や男性と同定したり、認識したり、名づけたりすることは、単に所与の対象を言語や概念によって表象することではない。それは、何事かを行うこととして捉えられるのだ。身体を男性か女性かに分類する (同定すること、認識すること、名づけること etc.) という言語や概念を用いた活動は、身体を性別化するひとつの行為として捉えられるのである。この意味で、「性別には男性と女性の二種類あり、人々は必ずその一方に属する」ということがらは、決して所与の社会的事実ではないと考えられるのである。

本稿の議論は以下のように進める。第2章では、セックス/ジェンダー二段構えの性別概念を採用することの問題点を整理する。第3章では、「性別には男性と女性の二種類あり、人々は必ずその一方に属する」という見方それ自体の歴史性を明らかにする諸研究を取り上げる。第4章では、性別 (男女二分法) の新たな捉え方について考察する。性別を <ジェンダー> として捉えるという見方には、言語や概念を使用する活動をとおして現実が社会的に組織化されるという考え方が含まれていると考える。このような捉え方によれば、それぞれの文脈においてどのようにして性別それ自体が分節化されるのかという前述の問いは、セックス概念やジェンダー概念を用いた諸議論それ自体にも向けることが可能になる。第5章ではこのような観点から、北米の社会学におけるジェンダー概念のあり方を批判的に再考する、C・イングラムの議論を取り上げる。イングラムは、北米の社会学におけるジェンダー概念に依拠した諸研究の前提、すなわち性別を男性か女性かという排他的な二項対立で捉えるという思考様式、それ自体にはらまれるある種の規範性を解明しようとするのである。

以上のような社会学内外におけるジェンダー概念再考の議論の検討をとおして、本稿では、性別

とは何か、性別に関わる社会現象をどこに見出したらよいのかをめぐって、いかなる社会学的な問題が設定できるのかを改めて考えてみたい。

2. セックスとジェンダーの区別の問題点

L・ニコルソン (Nicholson 1994=1995) によれば、「ジェンダー」という概念はフェミニズムの諸議論の中で少なくとも二つの非常に異なった、いくぶん矛盾したやり方で用いられているという (Nicholson 1994 : 79)。一方で、ジェンダーはセックスの対概念として捉えられ、生物学的な所与に対する社会的に構築されたものを表すとされる。この場合ジェンダーとは、典型的には身体から区別された性格上の特徴や行動を指すと考えられている。ジェンダーはセックスと明確に区別されうるものとして捉えられているのである。他方で、ジェンダーは男性と女性の区別に関わるあらゆる社会的構築を指して用いられるようになってきている。そこにおいては、社会は個性や行動を形作るだけではなく、身体が現われるやり方も形作ると考えられている。つまり身体そのものが、常に社会的解釈をとおして理解されると考えられているのだ。この場合セックスは、ジェンダーと区別されうるものではなく、むしろジェンダーに包含されうるものとなる。

「ジェンダー」概念を後者のやり方で用いる代表的論者は、ジェンダーを「性差 (sexual difference) の社会的組織化」として捉える J・スコット (Scott 1988=1992) である。ここで言われているのは、ジェンダーが、男性と女性という、固定された自然な肉体的差異を反映したり実行するというのではない。むしろジェンダーは「身体的な差異の意味を確立する知」として捉えられているのである (Scott 1988:2)。ニコルソンによれば、近年のフェミニズムの諸議論においてはジェンダーについての後者の理解が支配的になっているものの、依然として前者の理解も力を持っている。また場合によっては、後者の理解に立つとされる人々の議論にも前者の理解が見られるという (Nicholson 1994 : 80)。

そもそもセックスとジェンダーを分析的に区別するということは、1960年代後半、北米に第二波フェミニズムが登場するとともに始まった。その当時、性別とはもっぱら「セックス (男女の身体的差異)」の意味として捉えられていた。生物学と強い結びつきのあるこの「セックス」という概念には、性別を身体的所与とみなし不変と捉える見方が内包されていた。これに対して英語圏のフェミニストたちは、そもそも言語における女性形と男性形の差異を指すのに用いられていた「ジェンダー」という用語を、その意味を拡張して使い始めたのである (Nicholson 1994:80)。性別を「ジェンダー」として捉えることによって、男性とコード化されたものと女性とコード化されたものを区別する際に社会が果たす役割が強調されるようになった。このような「ジェンダー」概念は、何もかもがセックスであるわけではない、あるいは女性や男性に関わる差異の多くは身体的差異の因果論的結果ではない、と主張する手段として用いられてきた。それゆえこの場合のジェンダーは、セックスに置き換えられるものとは捉えられていない。むしろセックス (身体的性別) の所与性は、その上にジェンダー (社会的意味としての性別) が付与されるところの土台や基盤として、捉えられてきたのである。

ニコルソンによれば、こうした見方において身体とはいわば、そのうえに様々な社会的文化的人工物 (コート) が引っかけられるラック (コートかけ) である (Nicholson 1994 : 81)。性別をセックスとジェンダーの二段構えで捉えることは、この「コート・ラック」的見方を採用することである。ラックは所与かもしれないが、それに引っかけるコートは様々にありうる。身体的性別は自然

で不変であるかもしれないが、問題なのはその上に構築される社会的な性別である。そして、コートとしての性別は可変であり、社会や文化によっても異なりうるのだ。このような立論は、女性間の共通性と差異を同時に主張する基礎を与える。たしかに社会的に構築される女性のあり方——どんなコートが引っかけられるか——は、多種多様でありうる。しかしそのうちのある側面は、身体的性別に対する反応だと考えられる。ラックにあたる身体的性別（セックス）が通文化的に共通だとすれば、ジェンダーのうちのある側面は共通する可能性もあるというわけである。

このような見方はたしかに、女性間の共通性と差異の両方を説明する論理的枠組をもたらした。社会や文化のあり方によって男性や女性のあり方は違うと主張すると同時に、男性と女性の区別に含まれているある種の非対称性は通文化的だと主張することが可能になったのである。しかしながらその一方で、女性（男性）という性別について通文化的に共通のものがあると想定することは、近代西洋文化やその中の特定の集団に特有なことがらを一般化したり、同質とされる特定の文化や集団それ自体に多数のひび割れや避け目が入っている可能性を説明できなくする⁽²⁾と、ニコルソンは指摘する（Nicholson 1994 : 82, 97）。

そのうえでセックスとジェンダーのコート・ラック的な捉え方をニコルソンは、「生物学的基盤論（biological foundationalism）」と呼ぶ（Nicholson 1994 : 82）。彼女によれば生物学的基盤論とは、生物学的決定論とは異なる。たしかに、生物学的基盤論は、男性あるいは女性という性別に共通の生物学的ラックが存在するという前提に立つ。もし生物学的決定論であるならば、ラックのみが性別を決定するということになる。しかし生物学的基盤論者は、同時に何らかの形で社会的構築論者でもある。そこにおいて性別は、ラックに対する何らかの社会的反応によって構築されると考えられているのだ。すなわちここで言われる生物学的基盤論とは、厳密な生物学的決定論とラックという想定自体をやめてしまうことの間、様々な立場の連続体なのである。

ニコルソンは、このような生物学的基盤論を退け、身体そのものを常に社会的解釈をとおして理解されるものとして捉え直そうとする。女性に関して通文化的に共通の「ラック」を想定するのではなく、個別的な文脈において身体や、男性や女性であることがどのような意味を持つのかを問うことができる。すなわち身体は、定数ではなく変数として扱おうと言うのである（Nicholson 1994 : 83）。

3. 身体的性別の歴史性

この点に関しては、人間の身体は性別によって（男性か女性かに）二分されるという考え方にはそれ自体に歴史的な文脈がある、という指摘もある（荻野 1990,2009, Nicholson 1994 : 83-88=1995 : 110-115）。西欧においては18世紀頃まで、男性と女性の生殖器は本質的に同じものとして捉えられていたという。むしろそこでも、身体特定の部分は男性と女性という二つの概念において捉えられている。その場合、女性の生殖器は男性の生殖器の不完全なヴァージョンとしてみなされていたという。しかしそこで両者の生殖器の差異とは、種類の違いではなく程度の違い、つまり一連のグラデーションを成すものとして捉えられていたのである。

たとえば現在私たちが「卵巣」と呼んでいる女性の生殖器は、西欧では長らく「女性の睾丸」と呼ばれてきたという。女性の生殖器は、男性の外性器を「ひっくり返したもの」とも指摘された。女性とは、本来押し出されるものが内にとどまったままの「不完全な男性」として捉えられていたのだ。また、様々な体液のあいだにも互換性があると信じられていたという。経血は、体内の他の

場所からの出血（鼻血や怪我による出血など）と同じものとみなされ、出産後母乳に変化するとも考えられていた。月経とは体内の過剰な血液を排出することであり、男性も瀉血によって月経と同じ効果を得られるとされた。この場合月経とは健康維持のために不可欠な正常な過程であり、男性にもそれに相当するものがあると考えられていたのである（荻野 1990 : 24）。

女性身体と男性身体を連続体として捉えるこのような考え方の背後には、ある種の身体観が前提とされている。つまり身体を、個人が所有する明瞭に他から隔絶された「もの」としてではなく、自然と同じ秩序に従う相関的なサブシステムとして捉える見方である（荻野 1990 : 25）。しかしながら 17 世紀から 19 世紀にかけて西欧社会ではしだいに、人間を動く「物質」として捉えるようになっていった。そして人間の自己の性質を、それが包含している物質の固有の配置によって理解しようとする傾向が強まったのである（Nicholson 1994 : 84）。それに伴い 18 世紀以降、男性と女性の根本的な違いを強調する考え方が優勢となってくる。特に子宮と卵巣は、男性にはない女性特有の生殖器として注目される。そしてそれを根拠に、女性の男性に対する異質性、病弱性が強調されるようになったというのである。

近代における性別観の変化とそれに伴う身体観の変化については、インターセックスに関するフーコーの論述からも示唆される（フーコー = 蓮實訳 1980）。それによれば、インターセックスとはそもそも、一つの肉体に二個の性器がさまざまに変化する割合で並置されていること、つまり両性具有として捉えられていた。最終的に一つの性別に決定される際にも、そうした決定は二つのうちのどちらが優勢であるかを知ることとして捉えられていた。しかし 18 世紀以降、両性具有という考え方はしだいに採用されなくなる。一つの肉体における二つの性器の混在という考え方は否定されていくのである。そして、そうした混在は擬似的なものであり、混乱した外観の背後には唯一の眞の性器があるはずだという考え方に取って代わられたというのである⁽³⁾。

これらの議論から示唆されるのは、現在の性別観——すなわち、男性と女性を連続体ではなく排他的で異質な二項として捉える見方——それ自体が一定の歴史的経緯の中で成立しているということだ。このような男性と女性の身体の関係についての考え方の変化は、社会のあり方の変化と連動しているということもできるかもしれない（Nicholson 1994 : 88）。つまり、工業化や都市化の進行によって、家庭の外と内（公と私）の区別が生じ、それぞれ領域が男性と女性に結びつけられるようになったという変化である。実際、女性を子宮と卵巣という生殖器に一元化し、それらの器官を男性にはない女性の特有の病理の源とする見方は、女性の性質や行動を家庭向けに運命づけられているものとみなす根拠とされていたという（荻野 1990 : 50-56）。

ここで注目すべきは、社会の変化と連動して身体もまた性別によって様々なやり方で二分されるようになったことのみならず、身体が性別のあり方の基盤や「原因」とみなされるようになったことである。ニコルソンは、肉体的な差異に気づき、そうした差異に道徳的、政治的な意味を帰属させることと、18 世紀後半以降人間集団間の基本的分離を「説明する」ために肉体的差異を用いるようになったこととは同じではないと主張する（Nicholson 1994 : 86）。生物学的基盤論を見直す上で重要なのは、男性と女性の間の差異の根拠を——聖書やアリストテレスのテキストではなく——自然や身体の差異に求めるようになったこと、それ自体を一定の歴史性を帯びた出来事として捉え直すことなのである（Nicholson 1994 : 88）。

4. <ジェンダー>としてのセックス

前章でみたような歴史的な知見は、これまでセックスとして捉えられてきた性別のあり方もまた、社会的、文化的、歴史的な文脈をまぬがれてはいないことを示唆する。とするならば、(たとえば「生殖器の形態」などの) 身体的特性は二つの性別があることの根拠たりうるのか、社会的文化的に構築された性別(「ジェンダー」と生物学的所与としての性別(「セックス」)は単純に対置されるのか、という疑問が生じてくる。すなわち、身体的なことがらをも含めて何事かが男性と女性に二分されるということは、それ自体社会的、文化的、歴史的なことがら、つまり<ジェンダー>として捉え直すことが可能なのである。

この点についてニコルソンは身体的性別を、その上に文化的意味が構築されることの土台としてではなく、身体の読まれ方の差異としてとして捉えるべきだと主張する。彼女は、ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の考え方を引き合いに出し、「女性」の意味を彼の言う「ゲーム」の意味と同様のやり方で捉え直す(Nicholson 1994:100)。たとえば「カード・ゲーム」と「盤ゲーム」と「ボール・ゲーム」は、「ゲーム」と総称される。しかしこれら「ゲーム」と呼ばれる様々な行為は、いわゆる「家族的類似」、つまり互いに似ているけれども必ずしも一つの特徴を共有しているわけではないのだ。この点についてニコルソンはまた、「タペストリー」という比喻も用いる(Nicholson 1994:100)。タペストリーは、互いに重なり合う様々な色の織り合わせによって一つのまとまりを成しているが、全体をとおして特定の一つの色が見出されることはない。「ゲーム」や「タペストリー」のアナロジーを用いることでニコルソンは、「女性」の意味を、互いに重なり合ったり交差している様々な特徴の複雑なネットワークをとおして見出されるものとして捉え直そうとする。ここで問題になるのは、文脈ごとの互いの相似性や関係である。「女性」の意味のこのような捉え方は、「女性」には(例えば室を持っているなどの)中心的な特徴が存在するかもしれないという事実を認めると同時に、そのような特徴が存在しないような文脈においてもこの(「女性」という)言葉が使われる可能性を認めることである。

ここで主張されているのは、これまでセックスとして捉えられてきた身体的性別など存在しないということではない。そうではなく身体的性別を身体の読まれ方の差異として捉えることにより、そもそも身体を男性か女性かで二分することはどのような文脈で起こっているのか、あるいはそうした二分法があてはまらない文脈とはどのようなものか、それぞれの文脈で「女性」という言葉はどのような意味を持つのかということが、性別について説明すべき課題として設定可能になるのである。

J・バトラーもまた、セックスの不変性に疑問を投げかけ、「セックス」と呼ばれる構築物こそ、ジェンダーと同様、社会的に構築されたものだとして主張する。「実際おそらくセックスは、常にジェンダーなのだ。そしてその結果として、セックスとジェンダーの区別は、結局、区別などではないということになる」(Butler 1990:7=1999:28-29)。彼女によれば、ジェンダーとは、それによってセックスそのものが確立されていく生産装置である。つまり、文化の前に存在する「前-言説的なもの」としての「性別化された自然」や「自然なセックス」は、まさに当の文化によって作り出された構築物なのである。

このような主張の背景には、主体や他者、男性や女性という二元的関係やこれらの関係の内的な安定が、どのような権力の配置によって構築されているのかという問題意識がある(Butler 1990:viii=1999:8)。こうした問題意識に基づきバトラーは、「男性」と「女性」であれ、性別を付与さ

れる以前の単なる「人」であれ、何らかの行為に先立って存在する「主体」を想定する理論的前提を批判する。そのような前提を置くことは、多様で拡散した複数の起源をもつ制度や実践や言説の結果を、その起源と取り違えることになるからである。彼女は、「主体」を行為の源泉としてではなく、「アイデンティティ形成 (identification)」(Butler 1993: 1-23) という絶えざる過程の「結果」として捉え直す。そして、そのような「アイデンティティ形成」が、身体的性別としての「セックス」の「物質化 (materialization)」をとおして可能になると捉えるのである。

ここでは「セックス」の物質性それ自体は否定されていない。しかしそうした物質性を所与あるいは「自然」として容認することは退けられる。ここで物質(セックス)とは、位置や表面ではなく、「時を超えて安定化し、私たちが物質と呼ぶところの境界や固定性や表面の効果を産出する物質化の一つの過程」(Butler 1993:9)として捉え直される⁽⁴⁾。つまり「物質はいつでも物質化されている」(Butler 1993:9)というわけである。この物質化には「規制的な諸規範」が伴っている。「セックス」は、特定の身体のありかたのみに「人間」としての資格を与える効果を持つのだ。言い換えれば、「セックス」とは、男性と女性との階層性や強制的異性愛のヘゲモニーを有する「強制的な文化」の内部で個人を差異化し「人間化」する、一つの規範なのである。

バトラーは「セックス」のこのような規範性を、M・フーコーのいう「規制的観念 (regulatory ideal)」として捉える (Butler 1993: 1)。この場合「セックス」はひとつの規範として機能するだけでなく、ひとつの「規制的」実践の一部でもある。すなわち「この実践は支配の対象であるところの身体を自ら産出する。つまりこの実践の規制的力はある種の産出する力」であり、「言い換えれば実践のコントロールの対象であるところの身体を産出する——切り分け、流通させ、差異化する——力 (Butler 1993:1)」なのである。それゆえ、こうした物質化の過程は、そうした過程に先だって存在する主体によって経験されるのではない。そうではなく、ある身体の規範(男性か女性かいずれかのセックス)を引き受ける過程を経る結果、「主体」が形作られるのである。

ニコルソンやバトラーらの議論もふまえ、スコット (Scott= 荻野 1999b) は、セックスとジェンダーはどちらも歴史をもつ概念、すなわち知の形態であると主張する (Scott= 荻野 1999b:10)。セックスもまた言語によって分節化されるものであり、その意味は歴史的文化的に変化してきた。そうした意味において「セックス」とは人間が生み出す「知」であり、「自然」ではない。すなわち、セックスもジェンダーも、身体的なものと社会的なものという互いに異なった領域において身体を組織する様々な方法なのである。「セックス」をこのように捉え直すことによってスコットは、性別それ自体がどのように社会的組織の原理および実践として分節化されるかを問うべきだと主張する (Scott= 荻野 1999b: 17)。

このことは、通常ある出来事の「原因」とみなされてきたものを「結果」としてみなすことである。たとえば、政治の領域での女性の排除という現象において、性別は排除の原因ではなくその結果として捉えられる (Scott= 荻野 1999b: 18-19, Scott= 荻野 1999a)。性別とは、そもそも自律的個人間の平等という観念が成立すると同時に分節化されたのである。自律的な個人とは、人間の抽象的なプロトタイプである一方、他の誰とも異なるユニークな存在でもある。このような「個人」は他者からの認知、他者からの分離ぬきには成立しない。男性という個人の存在を保証する「他者」として、それ自体は個人とはみなされない女性が分節化されたと考えられるのだ。スコットは、政治と性別の関係について考えるときに、女性の排除に異議申し立てすると同時に、排除の根拠とされる「自然な」性別がどのように政治によって生み出されるのかを問うべきだと主張するのである。

以上述べてきた諸議論は、ジェンダーとセックスの分析的な区別を前提にしたジェンダー概念の

見直しを促すものである。すなわちそこにおいては、身体的なことがらをも含めて何事かが男性と女性に二分されうるということは、それ自体社会的、文化的、歴史的なことがら、つまり <ジェンダー> として捉えられると主張されているのだ。このような観点からすれば、女性あるいは男性「である」ということは何らかの活動の産物であり、それ自体一つの社会現象として捉えられる。身体を男性か女性かに分類すること（同定すること、認識すること、名づけること etc.）は、身体を性別化する実践活動（practices）とみなしうるのだ。「性別には男性と女性の二種類あり、人々は必ずその一方に属する」ということがらは、決して「端的な事実」ではないのである。

このような性別観に依拠することにより、性別について論じようとする際の問題も設定し直される。それはすなわち、それぞれの文脈においてどのようにして性別それ自体が分節化されるのかを問うこと、概念による性別の分節化が起きた状況やその効果を分析することである。「[男性や女性という] 語は、それらが呼び出される特定の文脈においてどのように使用されているのか。両性のあいだに無理やり境界線を引こうとする試みは、どんな利害関心に基づいているのか。どのような種類の差異が実行に移されているのか」（Scott= 荻野 1999b : 16）と、問うことができるのである。またジェンダー概念をこのような方向で捉え直そうという議論には、ある種の言語・概念観が伴っていると考えられる。この場合、性別を活動の産物と捉えることは、とりわけ、性別を言語や概念を用いた活動の産物として捉えることを意味する。女性や男性と同定したり、認識したり、名づけたりすることは、単に所与の対象を言語や概念によって表象することではなく、何事かを行うこととして捉えられるのである。

性別を <ジェンダー> として捉えるということには、言語や概念を使用する活動それ自体が社会的に組織されているという視点を含む。とするならば、それぞれの文脈においてどのようにして性別それ自体が分節化されるのかという前述の問いは、セックス概念やジェンダー概念を用いた諸議論それ自体にも向けることが可能であろう⁽⁵⁾。第5章では、このような観点から北米の社会学におけるジェンダー概念のあり方を批判的に再考する、C・イングラムの議論を取り上げる。イングラムは、北米の社会学のジェンダー概念に依拠した諸研究の前提である、人間を男性か女性かという排他的な二項対立で捉えるという思考様式（性別）、それ自体に内包されるある種の規範性を解明するのである。

5. 「ヘテロジェンダー」としてのジェンダー

5-1 フェミニスト的観点からの社会学的探究における知識批判の視点

この章では、北米の社会学におけるジェンダー概念のあり方を再検討している、C・イングラムの議論（Ingraham 1996）をレビューしよう。

イングラムは、北米においてフェミニスト的観点からの社会学的探究を試みた諸議論⁽⁶⁾の主要な功績として、それまでの社会学的な知識産出が依拠していた基盤を明らかにしたことを挙げる。フェミニスト的観点からの社会学は、メインストリームの社会学における理論的前提と方法的前提の両方に対して奥深い批判を行い、またその書き直しを行ってきた（Ingraham 1996 : 175）。それは社会学的知識の根底で循環している論理を明らかにする作業であった。社会学的文献と実践の中に権力関係としてコード化されている、自明視されている信念や価値や前提を解明しようとしたのである。そのために、社会学的文献において言われていることとされていないことを浮き彫りにし、両者の分裂や境界を理論化するという探究様式がとられた。言い換えれば、社会学的文献が他

の問題を隠しつつ、ある問題を提起するやり方を明らかにしたのである (Ingraham 1996 : 174)。

たとえば、社会学においては、女性の生活や女性に属する知識は典型的に無視されていた。育児や家事といった家庭領域でのケア・ワークが、メインストリームの社会学においては長らく無視され価値のないものとみなされてきたのはなぜか。このような問題意識から、社会学の文献や実践に埋め込まれた関心や仮定をフェミニスト的観点から考察し直そうという試みが出てきた。そして、男性と女性はヒエラルヒー的な対立項として位置づけられていることが、見出されたのである。男性と女性の差異や分業は相補的ではなく、男性中心主義的な規範によって組織されている。女性の生活や知識に対する無視や沈黙が「許容される」限りにおいて、社会学的知識もこの男性中心主義的な規範によって組織されているのだ。(社会学をも含む) 知識産出と社会生活の両方が男性中心主義的な理解可能性の枠組によって組織されていることは、「家父長制」と名づけられた。そしてこうした概念によって、社会学と男性支配の結びつきが理論化されるようになったのである。

フェミニスト的観点からの社会学的探究によるこのような試みを積極的に評価しつつも、イングラムは、今日そうした試みは、かつて社会学に対して行った批判的分析を自らに対しても行う必要が出てきたと主張する (Ingraham 1996 : 168-169)。今日、フェミニスト的観点からの社会学においても、ジェンダーという概念が自明視されるようになってきている。そうした概念によって何が指示されるか、どのような問題設定が可能かということが標準化されてきたのである。

しかしながらイングラムによればそうした動向は、フェミニスト的観点からの社会学の批判の対象である資本主義的家父長制社会が、男性中心主義的であるとともに異性愛 (ヘテロセクシュアリティ) 中心主義的でもあることを見えなくしてしまう。異性愛が社会を組織する一つの制度であることを、捉え損ねてしまうのである (Ingraham 1996 : 169)。そこで彼女は、ジェンダーという概念によって、何が言われ、何が言われていないのかを再考する。そのことをとおして、北米のフェミニスト的観点からの社会学が、異性愛的な世界を自然とみなす理解可能性の枠組によって組織されていることを、浮き彫りにしようとするのである。

5-2 ジェンダーをめぐる異性愛中心主義

イングラムによれば、ジェンダーという概念が依拠しているが言われぬこと (the unsaid) とは、男性と女性はあたかも磁気作用のように陽性と陰性として自然に引きつけ合うものだ⁽⁷⁾ という前提である。「女性」の問題として、なにゆえ家事労働や性別役割分業が主題になりうるのか。社会学によってほとんど見過ごされてきた「女性」の見えない労働や日常経験として、男性の賃金労働を可能にする育児や家事労働が第一に挙げられるのはなぜか。

このような問いを発することは、性別役割分業が政治経済的な力学と関連していることを軽視しようとするものではない。むしろ、社会生活が性別役割分業によって組織されているということは、社会生活が男性中心主義的に組織されていることのみを意味するわけではないのではないかと、問い直しているのである。イングラムによれば、性別役割分業を組織するもう一つの中心に、制度化された異性愛がある (Ingraham 1996 : 169-170)。男性中心主義的な規範と共に、異性愛中心主義的な規範が、男性と女性のヒエラルヒー的な位置づけや分業のあり方を透明にしてしまうのである。

イングラムは、フェミニスト的観点からの社会学の試みそれ自体が、性別役割分業が焦点化される一定の生活様式を前提としていると指摘する。育児や家事は普遍的な女性の仕事というよりは、制度化された異性愛を前提にした生活様式における「女性」の仕事だと考えられるのだ。これまで無視されてきた女性の労働や日常経験として、「男性と女性の」役割分業が問題になることには、「あ

る種の異性愛を前提とした生活様式において」という条件が付いているのである。

しかしながら、「性別役割分業」の問題は、端的に「ジェンダー」の問題として論じられる。ここでは、特定の社会関係に置かれた男性と女性のあり方が、ジェンダーの自然で普遍的な条件として仮定されているのだ (Ingraham 1996 : 178)。イングラムによればこうした点は、これまでのフェミニスト的観点からの社会学の諸議論において不問に付されてきた。言い換えれば、フェミニスト的観点からの社会学という知識実践もまた、異性愛中心主義的に組織されていたのである。

確認しておかなければならないのは、ここでのイングラムの主張は、社会学において非異性愛的な知識が周辺化されていることを指摘するにとどまらないということだ。彼女の主張の中心は、制度化された異性愛を自明視する規範的前提が、多くの専門的実践を組織する枠組として作動しているという点にある (Ingraham 1996 : 179)。すなわち彼女の問題設定は、周辺化されている知識をいかに中心化するかということよりも、そもそも周辺と中心、既存の知識の枠組に入らないものとするものという境界がいかにして成立しているのかを問おうとするものなのである。このような問題設定においてイングラムは、ジェンダーという概念枠組や理論枠組によって確立される境界を理論化しようとするのだ。彼女はこうした探究様式を、自らが批判的に再考する当のフェミニスト的観点からの社会学から継承しているのである。

社会学という専門的実践において、制度化された異性愛が規範的前提となっていることの典型的事例として、イングラムは北米における多くの社会科学的調査にみられる結婚状態に関する問いをあげる (Ingraham 1996 : 179-180)。

結婚状態に関する質問は、ほとんどの調査において「ウォーミングアップ」の質問になっている。この質問に関する様々な分類——既婚、離婚、別居、死別、独身、結婚しない主義など——は、それ以上説明を要さないものであることが示唆される。すべての回答者は、「自然」で単一な制度としての結婚や異性愛への参加をとおして、自らを社会的行為者として位置づけるよう導かれる。この誘いには、性的（非性的）に親密な関係を持っているかどうかに関わらず、自らを「独身」だとは考えない人、異性愛という関係で定義しない人、これらの配置に参加しない人も含まれる。しかしながらこれらの質問にある種の生活様式が前提とされていることは、ほとんど疑問視されることがない。そこにおいて異性愛という制度は、自然化されているのである。

イングラムは、社会学的知識が、暗黙のうちに異性愛中心主義的なやり方で組織されていることを指摘する。そしてジェンダーに代えて、「ヘテロジェンダー (heterogender(s))」 (Ingraham 1996 : 169) という概念⁽⁸⁾を導入する。この概念によって、ジェンダーをめぐる社会学の議論が、いかに制度化された異性愛を前提にし、仮定し、自然化しているかを浮き彫りにしようとするのである。

5-3 二項対立的性別の論理

イングラムによれば、北米の社会学においては、ジェンダーとは何か、それをどのように研究するのか、なぜそれが重要なのかということについて、一定レベルの合意が想定されるようになった (Ingraham 1996 : 182)。一方5-2でも示唆されたように、その場合ジェンダーとして想定されているのは、典型的には一夫一婦制終身婚を基本型とした近代社会の結婚制度における「男性と女性」である。ジェンダーの社会学探究において普遍的一般的な「男性と女性」の問題として扱われてきたことがらば、暗黙のうちに特定の生活様式における性別のあり方を指示しているのだ。そしてそのような生活様式を中心とみなすことによって、男性と女性は自然に引きつけあうものなのだとい

う想定が可能になる。イングラムによれば、このことは自然でも必然でもない。このような前提は、異性愛こそを自然とする理解可能性の枠組に照らして初めて成立可能になるのである。

しかしながら、考慮されないままになっているこれらの前提を可視化しようとする試みは、ジェンダーをめぐる根本的な立論によって困難になっている。それは、「セックス（自然）」を「ジェンダー（文化）」の基盤とみなす立論の仕方である。セックスは、「対立する性」としての男性と女性という唯一可能な配置から成るとされる。そして両者はしばしば、あたかも他の物理的側面（たとえば磁界など）同様、お互いに自然に引きつけ合うものとみなされる（Ingraham 1996 : 185）。このような「自然な性別」の捉え方においてすでに、性別に関する異性愛中心主義的な規範が作動していると考えられる。というのも、男性と女性は自然に引きつけあうという想定の中に、ある種の欲望のあり方を見出すことができるからだ。

生物学的な性別の判断の根拠がしばしば外性器の形態に求められることに象徴されるように、生物学的性別の捉え方においては、有性生殖を中心とするセクシュアリティのあり方が前提にされていると考えられるのだ。しかしながら定義上、性別のこのようなあり方は社会的文化的なものではなく、自然的生物学的なものとしてされる。そしてセックスを基盤としてジェンダーを捉えることによって、セックスの捉え方における規範的前提（制度化された異性愛）もジェンダーに持ち越される。それゆえジェンダーにおいても男性と女性という二つの性別は、変数というよりはむしろ、没歴史的で、静的な、それ以上問うことのできない二つの異なった実体として捉えられることになるのである（Ingraham 1996 : 186）。

イングラムによればフェミニスト的観点からの社会学の諸議論は、ジェンダーと社会制度の交点の分析に貴重な貢献をもたらした。そしてまさにその考え方を敷延することによって、性別の社会的探究の出発点をジェンダーからヘテロジェンダーへ転換することが可能になるのだ。イングラムの議論は、人間を男性か女性かという排他的な二項対立で捉えるという思考様式（性別）、それ自体に内包されるある種の規範性を解明するための方向性を示している。彼女は、「二つの、二つだけの性別があるはずだ」という発想、それ自体に内包される論理を問う。そして同時に、異性愛を自然な欲望の問題ではなく、社会規範の問題として捉え直すのである。

ここで「ヘテロジェンダー」とは、北米のフェミニスト的観点からの社会的探究という専門的実践において特定の男女のあり方を自然とみなす論理を与える、理解可能性の枠組である。性別に関して社会的に問うべき問題は、男性と女性が存在するという「端的な事実」の中にすでに内包されているのだ。イングラムの議論をふまえるならば、性別の社会的探究は、ある種の男性や女性が存在する / しないということを探究課題にすることができる。性別について言われていることと言われていないことの境界はいかにして引かれうるのか、という問題を設定することができるのだ。ある種の男性や女性が存在する / しないということは自然秩序にではなく、社会秩序に属することがらなのである。

6. おわりに

イングラムの議論は、そもそもジェンダー概念において言われること / 言われないことの区別が成立するのはいかにしてか、差異はなぜ見えなくされてきたのかを問い直す。いわば、本稿で検討してきたジェンダー概念の再考を促すきっかけとなった論点が、そもそもどのような仮定や前提の中から生じたのかを問うているのである。彼女の議論の中心は、単に既存のジェンダー概念の不

備を指摘したことにあるのではないと考える。本稿で着目したいのはむしろ、ジェンダーをヘテロジェンダーと捉え直すことをとおして、性別に関してそれ以上問うことができないとみなされてきた前提それ自体に、社会的に解明すべき問題が見出されるようになる点である。

竹村（1997, 2002 : 33-88）が〔ヘテロ〕セクシズムという概念で問題提起するように、セクシュアリティとは、セックスやジェンダーと並列的にならぶ独立した位置項目ではなく、相互連関的な概念と考えられる。というのも、近代社会において認知されているのは、終身的な単婚を前提とした、生殖・再生産を目的とする家庭内でのセクシュアリティ——イングラムの言う制度化された異性愛——という、唯一の「正しいセクシュアリティ」だと考えられるからだ⁽⁹⁾。竹村によれば、セクシュアリティという「エロスにまつわる〈フィクション〉」を語ることは、歴史的に決定されたカテゴリーであるジェンダー区分の「偶発性」を隠蔽し「本源的な」男女の身体区分を捏造するという効果を持つ。性差別と異性愛中心主義を両輪とした〔ヘテロ〕セクシズムは、唯一の「正しいセクシュアリティ」を再生産するメカニズムなのである。

イングラムや竹村の議論において、ヘテロジェンダーあるいは〔ヘテロ〕セクシズムという概念は、単純に既存のジェンダー概念に置き換えられているわけではない。たしかにこれらの概念は、ジェンダー概念の使用が常に文脈依存的であるという「問題」に着目することをとおして導き出された。ただしこれらは、既存のジェンダー概念の文脈依存的性質を解消し、より普遍的な説明を可能にする概念として提出されているのではないと考える。むしろヘテロジェンダーあるいは〔ヘテロ〕セクシズムは、性別に関わる諸概念がどのような文脈でどのような活動によって使用され、どのような男性や女性が多分化されるのかについてのメカニズムを浮き彫りにするための、一つの視点とみなしうるのだ。

本稿では、身体的なことがらを含めて何事かが男性と女性に二分されるということ、それ自体社会的、文化的、歴史的なことがら、つまり〈ジェンダー〉として捉え直す諸議論を検討してきた。この場合〈ジェンダー〉は、性別について何かを説明するための概念というよりは、むしろ性別をめぐるときの問いの所在を示す概念であると考え。何らかの出来事と独立に存在した出来事の原因とみなされている男性か女性かの区別は、それ自体がいかんして当の出来事の結果として生み出されるのか。一定の男性や女性の多分化は、言語や概念を使用するいかなる実践活動（practices）の社会的組織とともにあるのか。そのような実践活動の社会的組織化において、性別概念は他のいかなる概念と結びつくのか。また、それら諸概念の結びつきを可能にする、論理的な筋道とはいかなるものか。」本稿の議論をふまえるならば、性別をどう捉えるのか、性別に関わる社会的現象をどこに見出せばよいのかという論点に関して、このような問題が設定できると考えるのである⁽¹⁰⁾。

【注】

- (1) 社会理論におけるジェンダー概念について江原（1995）は、この概念の背後にある「問題」を3つに分類——1 性別の「生物学的」一元的把握 vs 性別の「自然/文化」という二元論的把握、2 自ら「普遍的」な「知」であることを主張する「人間」概念に基づく世界観 vs 世界観には「性別」があることを主張するフェミニスト的世界観、3 性別という軸に基づく社会理論 vs 性別という軸をいくつかの軸の一つとしておく社会理論——し、それぞれにおけるジェンダーの意味が異なることを指摘している。その分類によれば、本章で題材とするのは、主として一番目の問題（性別の「生物学的」一元的把握 vs 性別の「自然/文化」という二元

論的把握)を背景にしたジェンダー概念を再考する諸議論である。

- (2) 同質とされる集団内でのひび割れや裂け目の例としてニコルソンは、西洋社会において、生物学的二元性に基づく男性と女性の厳格な二元論的な区別と、男性と女性の差異を否定するような自己観念(フェミニストたちの議論の拠り所)が両立していることをあげる(Nicholson 1994: 97)。
- (3) 日本の近代化に伴う「男女が混在する身体」へのまなざしの変化についてはアルゴソ(2009)も参照。また橋本(1998)は、「インターセックス」としての自らの体験をとおして、日本における二項対立的な性別観のあり方の現状を明らかにする。その論述からは、医療の場においても社会生活の場においても、「男性か女性か」という二項対立的な性別観(そしてそれはしばしば「結婚」という概念と結びついている)から逃れることは非常に困難であるという日本の現状が浮き彫りになる。
- (4) ここでバトラーは、言語一元論や主体の形而上学に陥りかねない「構築(construction)」という語に代えて、「物質」あるいは「物質化」という語を提案している。
- (5) 実際、たとえばButler(1990=1999)、Nicholson(1994=1995)、Scott=荻野(1999b)において、そのような探究の方向性が示されている。
- (6) イングラムはS・ラインハルツ(Reinharz 1983,1984)とD・スミスの功績を挙げている。スミスの議論については、Smith(1987,1990a,b,1999,2005)および上谷(2004)を参照。また、スミスの社会学を「フェミニストの観点からの社会学」とみなす解釈に対する、スミス自身によるある種の反論については上谷(2010)参照。
- (7) このような前提については、Saidman(1991=1995: 27-28)も参照。それによれば、男性と女性の間にある種の磁気の引力や生物学的な引力を見出す考え方は、白人中産階級のヴィクトリア文化において、科学的に保証されキリスト教のドグマと一致するような性倫理を発展させる努力によって採用された。
- (8) 関連する概念化として伊田(1998)「カップル単位」、竹村(1997,2002)「[ヘテロ]セクシズム」の議論も参照。
- (9) 筆者はこれを、いわゆる「近代家族的生活様式」(上谷2007,2009a,b)における、セクシュアリティのあり方であると考ええる。
- (10) これらの論点に関する具体的な論考としては、上谷(2008,2009a,b)を参照。上谷(2009b)は、本稿で検討したイングラムの議論に示唆を受け、日本の社会学におけるジェンダー概念と性別概念の結びつきについて批判的考察を試みたものである。

【参考文献】

- テレサ・アルゴソ(2009)『『半男女考』——宮武外骨と大正時代の両性の接近——』in 荻野美穂編著(2009)『〈性〉の分割線——近・現代日本のジェンダーと身体——』青弓社, pp.151-178.
- Butler, Judith(1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York & London: Routledge.= 竹村和子訳(1999)『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱——』青土社.
- — —(1993) *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, New York & London: Routledge.
- — —(1997) *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, Routledge.= 竹村和子(抄訳)(1998)

- 「触発する言葉——パフォーマティビティの政治性——」『思想』10月号(892) 岩波書店, pp.4-46.
— — — = 高橋愛訳 (2000) 『ジェンダー・トラブル』序文 1999 『現代思想』12月号 (28-(14)), pp.66-83.
- 江原由美子 (1995) 「ジェンダーと社会理論」 in 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編 『岩波講座 現代社会学——ジェンダーの社会学——』 岩波書店, pp.29-60.
- ミッシェル・フーコー = 蓮實重彦訳 (1980) 「両性具有者と性」『海』9月号, pp.322-328.
— — — = 渡部守章訳 (1986) 『性の歴史 I 知への意思』 新潮社.
- 橋本秀雄 (1998) 『男でも女でもない性——インターセックス (半陰陽) を生きる——』 青弓社.
- 伊田広行 (1998a) 『シングル単位の社会論——ジェンダー・フリーな社会へ——』 世界思想社.
— — — (1998b) 『シングル単位の恋愛・家族論——ジェンダー・フリーな関係へ——』 世界思想社.
- Ingraham, Chrys (1996) “The Heterosexual Imaginary : Feminist sociology and Theories of Gender,” in Seidman, Steven (ed.) *Queer Theory / Sociology*, Oxford : Blackwell, pp.168-193.
- Nicholson, Linda. (1994) “Interpreting Gender,” *Signs : Journal of Women in Culture and Society*, 20 (1), pp.79-105 = 荻野美穂訳 (1995) 「〈ジェンダー〉を解読する」『思想』7月号 (853) 岩波書店, pp.103-134.
- 荻野美穂 (1990) 「女の解剖学——近代的身体の成立——」 in 荻野美穂・田邊玲子・姫岡とし子・千本暁子・長谷川博子・落合恵美子 『制度としての〈女〉——性・産・家族の比較社会史——』 平凡社, pp.13-77.
— — — (1995) 「訳者解題」『思想』7月号 (853) 岩波書店, pp.103-105.
— — — (2002) 「訳者解題」『思想』4月号 (898) 岩波書店, pp.5-6.
— — — 編著 (2009) 『〈性〉の分割線——近・現代日本のジェンダーと身体——』 青弓社.
- Reinharz, Shulamit (1983) “Experiential Analysis : A Contribution to Feminist Research,” in *Theories of Women’s Studies*, Gloria Bowles & Renate Duelli Klein (eds.) London : Routledge, pp.162-169.
— — — (1984) *On Becoming a Social Scientist*, New York : Transaction Books.
- Scott, Joan Wallach (1988) *Gender and the Politics of History*, Colombia University Press. = 荻野美穂訳 (1992) 『ジェンダーと歴史学』 平凡社.
— — — (1996) *Only Paradoxes to Offer : French Feminists and the Rights of Man*, Cambridge, MA : Harvard University Press.
- ジョーン・W・スコット = 荻野美穂訳 (1999a) 「女であることのパラドクス——フェミニズムの歴史を読み直す——」『同志社アメリカ研究』35, pp.25-35.
— — — (1999b) 「ジェンダー再考」『思想』4月号 (898) 岩波書店, pp.5-34.
- Seidman, Steven (1991) *Romantic Longings*, New York : Routledge. = 椎野信雄訳 (1995) 『アメリカ人の愛し方——エロスとロマンス——』 勁草書房.
— — — (1997) *Difference Troubles : Queering Social Theory and Sexual Politics*, Cambridge : Cambridge University Press.
— — — (ed.) (1996) *Queer Theory / Sociology*, Oxford : Blackwell.
- Seidman, Steven & David G. Wagner (eds.) (1992) *Postmodernism & Social Theory*. Oxford : Blackwell.
- Smith, Dorothy. (1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*, Toronto : University of Toronto Press.
— — — (1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*, Toronto :

University of Toronto Press.

- — — (1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*, London : Routledge.
- — — (1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*, Toronto : University of Toronto Press.
- — — (2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*, Altamira.
- 竹村和子 (1997) 「資本主義とセクシュアリティ」『思想』9月号 (879) 岩波書店, pp.71-104.
- — — (2002) 『愛について——アイデンティティと欲望の政治学——』岩波書店.
- 上谷香陽 (2004) 「ドロシー・スミスの『フェミニスト社会学』——性別の捉え方・論じ方の形式をめぐって——」お茶の水女子大学博士論文.
- — — (2007) 「近代社会の探究としてのジェンダーの社会学」『ソシオロジスト』第9巻第1号, 武蔵社会学会, pp.91-110.
- — — (2008) 「性別のエスノメソドロジー研究——ガーフィンケルの記述を再考する——」『ソシオロジスト』第10巻第1号, 武蔵社会学会, pp.1-18.
- — — (2009a) 「化粧と性別——〈素肌〉を見る方法——」 in 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編著『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学——』ナカニシヤ出版, pp.163-187.
- — — (2009b) 「性別概念と社会的記述——江原由美子『ジェンダー秩序』を読む——」『文教大学国際学部紀要』第20巻第1号, 文教大学国際学部, pp.1-14.
- — — (2010) 「ドロシー・スミスにおける社会的記述の問題—— institutional ethnography という視点——」『ソシオロジスト』第12巻第1号, 武蔵社会学会 (近刊) .